

Y1-11

国際活動での管理要員の役割と日常業務との関連～ジンバブエ救援活動を通して

名古屋第二赤十字病院 国際医療救援部¹⁾、
名古屋第二赤十字病院 管理局²⁾

○山下 勇吉^{1,2)}、白子 順子¹⁾、伊藤 明子¹⁾、
寺田 麗¹⁾、須賀 猛²⁾、池上 健二²⁾、
岩田 紀元²⁾、水野 純一²⁾

【はじめに】日本赤十字社のジンバブエ・コレラ救援事業に、第2班管理要員として初めて国際活動に参加したので報告するとともに、国際救援活動における管理要員の役割と日本での日常業務との関連について考察する。

【活動】日赤医療チームはクリニックでのアセスメント活動、衛生教育活動を行った。チームにおける管理要員の役割は安全対策、通信環境の整備、車両・運転手の管理、スタッフの移動管理、現地スタッフの活用・管理、前途金の管理等であった。具体的な業務に宿舎の警備員、給水会社との契約行為があったが、日本で自身が所属している部署で日常から目にしていく契約書と基本的には同じ内容であり、また、車両の管理や他の要員のための物資調達等については、日本での業務と同様であった。複数部署との調整行為、医療活動が円滑に進むための環境の整備等、施設において管理局職員が日々行っている業務と、今回の管理要員の役割は、非常によく似た点があり、日本での日常業務の経験が今回の活動でも役立つことがあった。

【考察】管理要員の業務は、1.危機管理対策、ERU資機材の使用方法等の日常業務では経験することのできないものと、2.人的管理、資金管理、契約関係等の日常業務を通じて習熟できるものとに大別できる。1については本社、各拠点病院が主催する研修に参加することで、また2については施設内で複数部署の業務を経験し、与えられた使命を達成していくことで、国際活動において必要とされる知識をも同時に身につけることができると考える。国際救援活動に限定した研修も当然必須ではあるが、それと同様に日常業務の重要性を再認識した活動内容であった。

Y1-12

ジンバブエ・コレラ救援医療活動報告

名古屋第二赤十字病院 国際医療救援部¹⁾、
名古屋第二赤十字病院 救急部²⁾、

名古屋第二赤十字病院 看護部³⁾、
名古屋第二赤十字病院 臨床工学部⁴⁾、
名古屋第二赤十字病院 管理局⁵⁾

○白子 順子¹⁾、ヤップ ユーエン^{1,2)}、
吉鶴 由紀子^{1,3)}、山田 悌士^{1,4)}、
新居 優貴^{1,4)}、山下 勇吉^{1,5)}、伊藤 明子¹⁾

ジンバブエでは2008年11月上旬からコレラ患者が大発生。12月上旬までに15,219人が感染、774人が死亡した。日本赤十字社（日赤）は感染症対応として基礎保健型ERUを派遣、チームは約3ヶ月にわたり救援活動を展開した。2008年12月中旬、第1班として派遣された10名は、ジンバブエ北部のマシヨナランドウエスト州のウルング郡を活動地域とし、現地の保健省の協力のもと、診療所やコレラ治療センターでのコレラ患者の死亡率を下げることを目的に活動を開始した。活動内容はコレラの蔓延状況の調査、郡内にある25のクリニックのアセスメントと治療に必要な物資の供給、コレラ治療の標準化を目的としたスタッフ指導、コレラ治療センターの設立であった。これらの活動により、第2班到着時にはクリニックでの死亡率は減少傾向となっていたが、地域でのコレラ死亡率は横ばいであり、コレラに対する地域住民の知識不足が考えられた。そこで第2班ではコレラ患者の治療支援を継続すると同時に、衛生教育活動を本格化し、ジンバブエ保健省とジンバブエ赤十字社と共同で、コミュニティ（19か所）および学校（10か所）での衛生教育活動（Hygiene promotion）を展開した。第3班もそれらの活動を引き継ぎ、最終的にコレラ治療センターも保健省へ移管した。ウルング郡内のコレラ発生は1月下旬をピークとして徐々に減少した。ジンバブエ・コレラ救援活動は日赤としての初めての感染症対応の救援であったが、基礎保健ERUでの有用性も確認された。